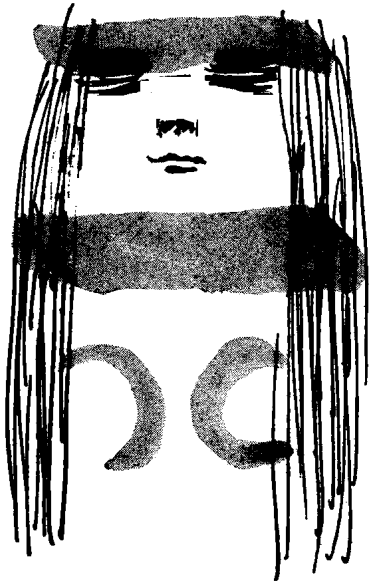
孤独な青年の休暇大江健三郎新潮社版

休暇



孤独な青年の休暇　大江健三郎　新潮社版

孤独な青年の休暇

一九六〇年五月一日　印刷
一九六〇年五月五日　発行

定価　二九〇円

著者　大江健三郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(三四一)(七一一一)(六一〇一)～九五
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・図書印刷株式会社・製本　神田　加藤製本所
© K. Oe. Printed in Japan

孤独な青年の休暇　五
後退青年研究所　九九
上機嫌　一三三
共同生活　一八七
ここより他の場所　二三九
後記　二六二

装

幀

岡

本

半

三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

孤独な青年の休暇

孤独な青年の休暇

I 浮浪者

冬だった、真夜中のように暗く冷たい夕暮で、体が凍えきるまで歩いても何ひとつ心を快活にする事物に出会わなかった。しかし、その夕暮が私の廿五歳の誕生日だったのだ。街路樹も屋並も人々もすべて醜かった。とくに空がひどかった、それは汚物のような灰黒色をして斑だった。私は自分がこの汚ならしい空のもとで廿五歳の誕生日をむかえようとしているのを、一つの屈辱的な刑を執行されているもののように感じた。なんの罪のために、前世の罪か？　と私は考えた。それは、いま廿五歳の青年として生きていること、それ自体の罪だ、おれには責任がない。しかし誰ひとり責任のあるやつはいないのだ、責任なしで、頭にひっかぶるだけだ。何を？　この汚ない空を、真冬を、暗く冷たい夕暮を。いま、廿五歳の青年として生きていること、とおれがい

う。そこで分別ざかりの連中が、なぜいまなんだ、自分たちも廿五歳を真夜中のように暗い夕暮に怒りと寒さとみたされない欲望に震えながらすごしたのだ、という。しかしそれならそれでいいのだ、おれはいまという言葉をけずってもいい、とにかくおれが廿五歳をむかえたのはいまにほかならないからだ。そしておれにとって過去も未来も、いま以外のいかなる時も関係がないからだ。そして過去の時代に数しれない美しくすばらしい冬の夕暮があり、未来の時代においても黄金の夕暮がいくたびもいくたびもくりかえされるにしても、おれがこんな汚物のいっぱい流れている沼のような空の下で、やがてすぐ湧いてくるだろう不快な霧の予感のようなものにたいしてアレルギイ症状をおこしている鼻孔の粘膜をぐずぐずいわせながら、湿っぽくて重い外套を肩にひっかけてよたよた歩いているこのいまはいつまでたっても償なわれることがないからだ。

不意に私はどなりつけられた、それは世界の暴力的な一大圧制者が不意に出現して私をどなりつけたほど私を心の底からびくつかせ憤懣やるかたない思いにしたが、どなっているのは黒々と大きい鬼のような道路工夫で、その男は武器のような鶴嘴をふりかぶっているのである。私はもの思いにふけって歩いているあいだに道路工事の現場に踏みこんでしまっていたらしいのだ。私は慌てふためいて柵の外へとび出てから、その理不尽にも私を子供をおどかすように威嚇した道路工夫に憎悪を感じた。私は舗道を前屈みに歩きつづけてきたにすぎないではないか、そして舗道は前へ前へ歩みつづけられるようにつらなっている筈のものではないか、その人の歩きつづけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るべき舗道を、この暗い夕暮に半裸で鶴嘴をふりかぶり掘りかえしている男こそ咎められるべきではないか？　私はふりかえって道路工夫を睨みつけたが、もちろん私にはその鶴嘴を持った大男を侮蔑しかえすてだてはなかった。そこで私は工事現場の濡れた泥がこびりついて重くなり、しかも舗道にすいついてしまう靴をひきずりながら都電の線路をわたり向う側の歩道へわたって行きながら、道路工夫への呪咀の言葉をつぶやきつづけるほかになにもおこないえない。そして注意を怠れば涙まで流れでてしまいそうな具合なのだ。私は向い側の商店街を歩きながら、なにかユーモラスなものを見つけて気分転換をはかりたいと思ったが、たまにやってくるサンドイッチマンは尊大で孤独なしかめっ面をしているし、なにか四角いものをくわえてやってきた犬は、角のような耳の憂鬱な顔つきをしたつまらない犬で、それは道路工夫を大きい鬼だとすれば、小さい鬼とでもよべそうな犬だった。

そして私の心によみがえってきたのは愉しい回想ではなく、辛い思い出で、それは高校の時の友人が神経衰弱にかかっていた時分のエピソードの一つなのだ。その友人はあらゆる事象に被害妄想をかきたてられる心理状態になっていたのだが、ある日その友人がさも重大なことのように告白するのには、その前日かれが街を歩いていると背後から一匹の犬がやってきてかれの足にどしんとぶつかり、そのまま前へ走りぬけて五米ほど前で、かれをじろっとふりかえって見たというのだ。

それからもう一つ私の心によみがえってきた辛い回想は、私が冬休のあいだ、あまり親しくない親戚にあずけられて孤独な日々をすごした小学校の時分のある夕暮のことで、私は小さい驢馬が大きい荷車をひいているのを見つけ、その可哀想な孤独な仲間をいたわるつもりで、馭者が荷おろしをしているすきに、手をのばして驢馬の鼻面をなでてやろうとしたのだが、驢馬は突然すさまじく大きくにょきにょきと歯の生えている口をあけて私の友情の指を咬みきろうとしたのだ。私はその驢馬がむなしく夕暮の空気を咬んだガプッという音を再び耳のまわりに聞く思いがして震えた。あの時はじめておれはこの現実世界、外部世界が他人の暴力的な敵意をぎっしりうえこんだ壁のようなものだと理解したのだが、事情はいまもまったく変ってはいない、むしろおれは驢馬だけが咬みついてくるのではないと深く痛切にさとっている始末だ。

私は都電の停留所の前まできていた、そしてそこは私が毎日電車に乗る場所なので、私の下肢は飼いならされた家畜のように（都電が、会社が、同僚や上役が飼いならしたのだ、飼いならし強制したのだ）とどまっていた。しかし今日はおれの廿五歳の誕生日ではないか、と私は強制になれてしまった自分自身の肉体に反撥して考えた。おれは廿五歳の誕生日くらいは自由に解放された時間をすごすべきではないか、おれは今日もまた、この汚ならしい空の昏れなずむ下を都電の混雑にまきこまれて下宿までかえってゆくのか、昨日、一昨日、そしてその前の日も、前の日もずっと続けてき、明日からも続けるように。この汚物がよどみたまっている沼のような空の下

をかえって行くと下宿は夜のなかのいちばん暗く冷たい穴のようにしかおれを待っていないというのに。

私は不意に、自分がこの考えに耐えられないのを、とくに汚ならしい空という考えに耐えられないのを感じた。私はタクシーにむかって腕をふりまわした。タクシーの運転手は意外な客をのせようとしているような怪訝な表情で私のために後部ドアをひらいた。

海の見える所へやってくれ、と私はいった。

運転手はちょっとためらっていた、私はくりかえして海の見える所へ走るようにいいながら、自分の声が荒あらしくささくれだっているのを不快な騒音を聴くように自分の耳に聴いていた。車は大きく方向転換すると、夕暮の空のやや明るい方にむかって走り出した。私は海の傍にゆけば広い空が見え、そしてもしかしたら西の空の片隅には薔薇色の明るみの一かけらが残っているかもしれない、と考えたのだ。そして車が暗い方へでなく、明るい方にむかって方向転換したことは私に、わずかながら希望をいだかせた。車が下宿とは逆の方向に走っているということも、私の心に力をあたえる作用をした。私は車のなかのかすかなあたたかみに躰をゆだね、眼をつむった。

私はその日、廿五歳の誕生日をむかえていた、そして自分のためにささやかな祝宴をひらきたい気分だった。しかし私は現実世界の壁に頭をぶっつけてもいたのであり、私はどんづまりに追

いつめられた思いで、この他人どもの悪意の世界の罠に足をとらえられていることを感じてもいたのである。

率直にいえば、私は下宿の賄人の娘を妊娠させてしまったためにその罠にがっちり足を喰いこまれていたのだ。私はその娘を、自分の醜さをよく自覚しているために横柄で、かつ愛のあらゆる側面を性欲にむすびつけることしかしないその娘を愛していなかった。愛の幻影さえいだいたことはない。孤独な廿代前半の青年、それもあまり純潔でない青年をおそう性欲の発作が私をその娘にむすびつけた唯一のものだ。愛よりもむしろ嫌悪が、その醜く不潔な娘への嫌悪が、始めから私にははっきり意識されていたのだ。私は汚れた下着を寝そべったまま腰をうかして脱ぎ、しかもそれを片足にからめたまま、私にその性器を露出して見せた娘と始めて性交渉をむすんだ時から、その娘への嫌悪と軽蔑に、かえって猥らな気分をあおりたてられるのを感じた。そういう行為のあとで娘がまじまじと私を見つめ卑猥な笑いをうかべながら私にむかって投げかけた言葉を私はぞっとしながら思いだす、《あんたもひどい助平ねえ》

私は自分が一匹の牝と寝ているのだと、一種の獣姦をおこなっているにすぎないと考えていた。そして手ひどく復讐されることになった。性的に無知というより、ものぐさからいかなる避妊の方法もこうじなかった娘は妊娠し、私に結婚するか、またはそのかわりに娘が親たちをあざむいて関西の都市に行き、人工中絶し健康を回復して戻ってくるまでの費用として五万円を調達する

かを要求するにいたったのだ。私はいうまでもなく娘と結婚する意志はなかった。出産など思ってみるだけで吐気をもよおした、ああ、この獣の牝のような女と子供に若い身空をがんじがらめに結びつけられること、それは死よりもなお徹底した未来の抹殺ではないか。

しかし私は大学の文科を卒業しはしたものの小さい貿易商社の下級社員にすぎない。私は富裕な両親も持たねば貯金があるわけでもない。私は二月分の給料をそれこそ必死の懇願をもって前借りしたが、それは三万円にみたなかった。私はその前借で上役への信用をなくし同僚たちから警戒され始めた。そしてなお、下宿の賄人の娘を三万円たらずで納得させる苦役をこれからおこなわねばならなかった。夜ふけのように暗い夕暮のよそよそしい雑踏をぬって走るタクシーのなかで、私は前借りした給料の入っている胸ポケットの奥に鬱屈しきった心をいだいていたわけである。その上、私はある交叉点ですれちがう車の中に、前借りを頼みこんだ課長が乗っていたのを見たように思ったのだ、《あいつは給料を前借りしたばかりかタクシーにふんぞりかえって遊びにでかけるようだった》

車は空の明るみに向って走ってはいたが、私の心はもう楽しまなかった。私は課長にたいしてびくびくし、娘にたいして腹をたて、そして来る二月間の無一文の生活におびえていた。それも娘が三万円たらずで納得してくれての話だ。私はほんの少しの愛もなしに、嫌悪の思いで、それに殆ど深い快楽も味わわずに、その下品で片意地な娘と性交渉をもったことに絶叫したいほどの

怨めしさと後悔とを感じた。私は自分のみじめな性欲に不当な激烈さで復讐されているように感じた。いうまでもなく私がおちいった罠は結局は私自身の手によって掘られたものであり、娘にたいして怨みと怒りとを感じるのは身勝手というものだろう。しかし私は娘と、自分のおちいっている窮境について考えるたびに、娘へのどす黒い憎悪にとらえられてしまうのだ。娘は妊娠がはっきりしてから私にその躰にふれさせようとしなかった。彼女は私が性交渉をつうじて彼女を流産させかねないと、私の性器に関係づけた卑猥な言葉を私に吐きかけ、関西の高級ホテルに滞在して名家の令嬢のように中絶することをたのしみにしているというのだ。私は嫌悪している女から拒まれることで二重に屈辱を味わった、《手淫でもしたらいいじゃないの》と娘がいった時には殺意さえいだいた。私は自分のみじめな性欲をもっとも恥じるべきだろうが、それは私の大学卒業以来の期待はずれの青春を恥じることなのだ。

私は自分のタクシーの運転手、他のタクシーの客と運転手、バスと電車の乗客たちと運転手、車掌、通行人たち、交通整理の警官、店舗のなかの人たち、それらすべてに一種の嫉妬と羨望とを感じた。かれらはおれのように妊娠した情人から脅迫されていない、それだけでおれとまったくちがう世界に、光にめぐまれた世界に住んでいることになる、と私は考えた。その考えは大学の教養学部の一年生の時にかかった被梅毒妄想の苦渋にみちた体験の記憶を喚起した。あのころ、おれは他人を見るたびに、こいつは梅毒にかかっていないのだ、と考え羨望に胸をふさがれたも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com